

小郡音楽祭制作市民

ミュージカル

「ハードル」〜真実と勇気の間で〜

音楽の街づくりに取り組んできたこの15年、ジャンルも世代も地域をも越え、人と人が紡ぎだす心の大切さを未来につないできた「小郡音楽祭」。

今、大きく問われている心の問題に対して、私たちが何かできることはないか問いかけます。

私たちは一つの答えとして、音楽を通してメッセージを送ることを決めた！

感動を呼ぶ66人の仲間たち
と「おどおり七夕太鼓『白鷺会』」
「くるみバリエスタジオ」の皆さん



10月20日、本番を迎えた舞台裏。主人公の麗音（レオ）役はダブルキャスト、星組の平田智絵里さん（小郡高1年）と花組の佐伯綾香さん（三国中2年）ら66人の出演者のほか総監督を務める山崎三代子さんが開演のベルを待っていた。



▲家族が離れ離れに



▲新しい友達との出会い



▲いじめ



▲母の実家での生活



▲生死の境をさまようレオ

作品の内容

バスケも勉強もなんでもできる有沢麗音（レオ）は、佑樹の自慢の兄。

しかし、父の会社が倒産して、父親と母親仲がうまくいけなくなり、横浜から宮城県古川の母の実家へ引っ越すこととなります。

そこで二人は友だちという宝物を手に入れますが、レオは強引にバスケ部に勧誘する教師や部員たちと問題が。入部を拒むレオを待ち受けていたのは、素晴らしい仲間でした。

雪の降る朝、階段から突き落とされ、レオは生死の境をさまよいます。

レオの過失による事故ということで問題を封じ込めようとする大人たちに、子どもたちは立ち上がります。

意識を取り戻しても生きる気力を失いかけていたレオ。ひいおばあちゃんが胸に秘めていた戦争の体験を初めて聞き、「声を上げれば良かった。声を上げればきっと誰かが聞いてくれる」という言葉に、やがてレオは自分のこころの「ハードル」を越えようと生きる力を取り戻します。

家族愛、兄弟愛、友情、いじめ、差別、戦争など大きなテーマに向き合いながら、それぞれが自分のこころのハードルを越えようとする勇気と感動の物語。

子どもたちの「感動した本・心に残った本」の上位にランクされるベストセラー「ハードル」。社会問題化している「いじめ」をテーマに、子どもたちが、そして大人たちが心のハードルを越えようとしている姿を初のミュージカル化によって描き出しています。

出演者がラストシーンで「声を上げよう、声を上げよう」と歌い、尊い命を守るために勇気をもって声をあげようという原作者のことばがつけかけた延べ2,000人の観客に、感動と共に伝ったのではないのでしょうか。



▲そのハードルを越えて…



▲自閉症の友だちのために子ども達が立ち上がる



▲元気になったレオ達に戦争の体験を話すひいおばあちゃん



▲いじめに対して立ち上がる人たち



▲手紙を受け取った市長も子ども達を訪問



▲「もっと早く気づけば」と家族が再び絆を取り戻す



▲意識を回復したレオ



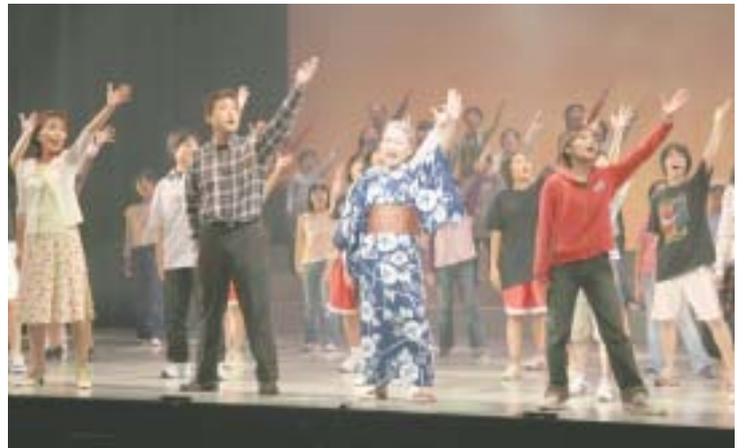
(レオ役の佐伯綾香さん) 21日出演

このミュージカルに参加して、相手の気持ちを考えてみようになった。部活があまりできなかったので、頑張りたいと思います。



出演者の感想
(レオ役の平田智絵里さん) 20日出演

初めての体験でしたが、成長していくレオを演じて、私自身も明るくなった気がします。できれば、今後も演劇を続けていきたいと思えます。



▲感動のフィナーレ

子どもたちの成長とともに生きづく・・・



(本番前の緊張の場面だが、子ども達はいつも元気)

市民ミュージカル「ハードル」合宿・公開練習
8月25日～26日

この8か月におよぶ期間の中で作品を作り上げる過程は、出演者のみならず約30人の「市民ミュージカル「ハードル」制作ボランティア」など周りの多くの人たちに二度とない貴重な経験を与えました。

練習風景、そして本番
いじめ問題をとりあげた今回の市民ミュージカル「ハードル」真実と勇気の間で、3月の出演者公募から始まり、8月の合宿などを経て、出演者は気持ちを一つにしてきました。



(ひいおばあちゃん役で総監督の山崎二代子さん)

いじめ、障害や偏見など多くのテーマを含んだこの市民ミュージカル「ハードル」を通して、「勇気を持って声を上げよう。尊い命を守るために」というメッセージが皆さまに届きますように。